心の曉

帝キネ現代映畫

寫眞

「心の曉」帝キネ印南弘作品。右より山路ふみ子と津村博。

原作並脚色者　民門敏雄
監督者　印南弘
撮影者　宮二義曉

——主要役割——

澤井清之　中村かん京
その妻　小池春江
息　晋一　大原讓
娘　京子　水原玲子
安田士郎　津村博
妹　圭子　ミナト映子
同　登美子　山路ふみ子
圭子の夫　津田　小宮一晃
安田の父　高島登
同母　中村榮子
大森　柳田敬治
伯爵　南小路保昌　松本泰輔

解説——印南弘氏の「燃れる太陽」に次ぐ作品である。

略筋——日本綿絲會社の綿花買付の爲め印度に派遣されてゐた安田士郎は七年振りで歸國した。彼は一年以前に印度貿易界の巨人南小路伯爵の力添えで折柄危かつた會社を復活させた功勞で内地へ榮轉したわけだつた。彼と共に歸國の途についた伯爵は士郎に惚れ込み自分の方へ引き込みたかつたが士郎は現在の社長澤井に非常に恩顧を感じてゐたのでそれに應じる事が出來なかつた。しかもその娘京子は彼の戀人だつた。しかし故郷は七年の間にすつかり變つてゐた。妹の登美子は京子の弟晋一の弄び者となつて快樂に耽つてゐるし父母もそれを喜んでゐた。彼は苦惱した揚句、たゞ一人の京子にも背いて一家をあげて印度へ引越した上、奴隷的な感情から浮び出るより仕方ないと決心した。登美子は晋一等とドライヴに出かけた途中、晋一の惡ふざけから彼女は崖の上から落ちて重傷を負ひ片眼をつぶして了つた。晋一はそれきり見舞にも來なかつた。士郎はたまりかねて妹との結婚を強要したがそれが社長の怒りを買ひ免職となり退職手當と共に五千圓の金で妹の手切れを申し渡された。士郎は激怒した。しかし南小路伯に宥められて在職中の決　報告方々五千圓を返しに行つたが又もや社長と晋一に侮辱されて遂に彼はピストルを向けた。が彈丸は當らなかつた。彼は思ふさま社長を侮辱して去つた。かれて伯爵から勇氣づけられてゐた京子も決心して家を出て士郎の許に走つた。伯爵は喜んで士郎を迎へて自分の代理とし、日本綿絲とは到々關係を斷つて了つた。